

■ リスク警戒に伴う円高の流れは一巡

昨日（26日）、ついに公表された米税制改革案の骨子は法人税率の15%への引き下げ、課税区分の簡素化、子育て家庭の税控除など広い範囲をカバーするものとなった。

事前に米財務長官が「史上最大規模の減税になる」などと、あらためて大風呂敷を広げたことで一時はドル円が111.80円付近まで上値を伸ばす場面もあったが、公表後はその内容にサプライズはなかったことや減税の一財源と見込まれていた「国境税」への踏み込みがなかったことにより、そこは一旦「材料出尽くし」、「事実で売り」のパターンとなって、後にドル/円が110.70円処まで売り戻される場面もあった。

米暫定予算案を一週間延長したことや、今週28日にもヘルスケア修正法案が採択される可能性が高まってきたことなどドル強気の流れを支援する材料もないではないが、それらは上値追いの決め手にもならず、当面は強めの米指標の結果など次の材料待ちという状態が続こう。

もちろん、なおも北朝鮮リスクはそこにあり、現在行われている米韓合同軍事演習の終了（30日の予定）後までは少なくとも緊張状態が解けない。いずれ「米原子力空母カール・ビンソンを中心とする空母打撃群が北朝鮮近海から離れ始めた」などという話にでもなれば、ようやくファンダメンタルズ主体の流れに少しずつ戻って行くこととなろう。

目下のところ、ドル/円の週足は31週線や一目均衡表の週足「雲」上限との攻防を繰り返す格好となり、まずはそれらの節目をクリアに上抜けるかどうかを見定めたい。なお、前回の本欄でも注目したように、先週と先々週の週足は62週線にサポートされる格好となり、とりあえず仏大統領選の結果や北朝鮮リスクへの警戒によって一時108円台前半まで下押しという弱気の流れは一巡している。

来週にかけて、ドル/円が31週線や一目均衡表の週足「雲」上限をクリアに上抜けて行く流れとなれば、まずは3/31高値=112.20円処が試されることとなろう。仮に112円台にまで到達すると、そこには日足「雲」と89日線の存在が控えており、いずれはそれらの節目との攻防になる可能性もある。今のうちから、ある程度は想定しておきたい。

また、今週末28日は4月末でもあり、4月の月足・終値が一目均衡表の月足「雲」上限よりも上方の水準に留まるかどうかを確認しておきたい。思えば、昨年10月、11月の月足も「雲」上限にサポートされる格好となっただけで、やはり互いの位置関係は重要と見られる。

一方のユーロ/ドルは、仏大統領選の結果を好感したことや、本日（27日）行われるECB理事会後の総裁会見のなかで「近い将来において金融緩和の解除を協議する可能性」に言及するとの見方が一部にあることなどにより、足下では一時1.0950ドル処まで大きく上値を伸ばす場面が垣間見られている。

ゴールドマン・サックスはレポートで「ルペン大統領就任の確率が低いと市場が見做せば、ユーロ/ドルは1.1300ドル近くに押し上げられる可能性がある」と指摘している模様だが、それは果たしてどうか。仮にユーロ/ドルが一つの節目の1.1000ドルに到達し、さらにそれを上回るような動きを見せれば、昨年11月の米大統領選以降のドル高がすべて帳消しになるわけだ。現実問題として、米・欧の金融政策の方向性などを考慮すると、一段のユーロ高・ドル安に向かうというのはなかなか難しいことのようにも思える。

一つには、まず本日のECB理事会と総裁会見の内容に対して市場が「失望」の反応を示す可能性がある。もちろん、まったく逆のパターンもあり得るが、その結果、一時的にも跳ねた場合は売り戻りスタンスで臨みたいと個人的には考える。

また、今のところユーロ/ドルの週足が62週線（現在は1.0965ドル）に上値を押さえられる格好となっていることも注目されるし、昨年5月高値と11月高値を結ぶレジスタンスラインが、今まさに1.1000ドル割れの水準に向かって下降してきている点にも注目しておきたい。

（04月27日 12:25）